



評者  
津田塾大学  
学芸学部 教授  
**西川 賢**

**陰謀論入門**  
**誰が、なぜ信じるのか？**  
ジョゼフ・E・ユージンスキ 著／北村京子 訳  
作品社（2022年4月）2,400円＋税／247ページ

## 現代社会の影を読み解く

本能寺の変で織田信長に反旗を翻した明智光秀の背後に「黒幕」がいたのではないかと、という話を聞いたことはないだろうか。また、ケネディ米大統領を暗殺したリー・ハーヴェイ・オズワルドは単独犯ではなく、背後に大掛かりな企みがあったのではという話を耳にしたことはないだろうか。

先日、ニューヨーク州バッファロー市で発生した無差別銃乱射事件は日本でも大きなニュースになった。容疑者は、政府や企業の企みによって、白人が意図的に人種的マイノリティーに取って代わられるよう仕組まれているとする「白人置き換え論」を本気で信じていたといわれている。

詳しくは本書を読んでいただきたいが、人がこの種の話の明確な根拠なく信じてしまうのは、認知、心理、性格などの心理学的要因に加えて、所属する集団への愛着に代表される社会的特性によるところが大きいとされる。例えば、北京冬季五輪のジャンプ混合団体戦では、日本のエース、高梨沙羅選手をはじめ、多くの失格者が出た。あれは強豪選手を狙い撃ちにした、何者かの策略だったに違いない——さしたる根拠もなく、そう考えてしまった日本人も少な

くなかったようだ。

以上の話に共通するのは、権力を持つ少数の集団が公共利益を損なうべく、極秘裏に何事かを企てること、すなわち陰謀が事件の背後に存在するという発想だ。陰謀は実際に存在するかもしれないし、根拠のない荒唐無稽な作り話の可能性もある。特定の出来事がある種の陰謀によって生じたものと考え、それに基づいて説明しようとする考えを陰謀論という。誰もが少なくとも一つは陰謀論を信じているといわれる。

日本においても、ワクチンやマスクに関連する陰謀論がしばしば取り沙汰される。しかし、そもそも陰謀・陰謀論とは何か。人はなぜ陰謀論に取りつかれるのか。陰謀論はわれわれの社会にどのような影響を及ぼすのか。「陰謀論Ⅱ悪」という単純な理解は正しいのか。陰謀論にはどのような向き合っていくべきなのだろうか。陰謀論と見なされるものをとにかく規制すれば済むのだろうか。

これらの問いに対する答えは、すべて本書にある。著者ジョー・ユージンスキ教授は、米国における陰謀論研究の第一人者であり、主として米国の豊富な陰謀論の事例を参照しつつ、陰謀・陰謀論について縦横無尽に解説している。陰謀論に基づく誤解や悲劇が繰り返される現代社会を考える上で、必読の書といえるだろう。